

課題名：モモの安定経営対策

指導対象：JA 紀の里桃部会、あら川の桃振興協議会

### 1. 取組の背景

那賀地域は県内一の桃産地であり、特に「あら川の桃」というブランド名は京阪神に広く浸透している。

しかし、近年は収穫までに強風雨にさらされる事が多く、せん孔細菌病の多発や、温暖化にともない、カイガラムシ類の発生時期にずれが生じ、適期防除ができず、多発を招くなどの問題がある。更に、平成 29 年にかつらぎ町において発見された特定外来生物「クビアカツヤカミキリ」の侵入も懸念される。

そこで、農業水産振興課では、せん孔細菌病の対策試験や、カイガラムシ類の発生時期の予測、「クビアカツヤカミキリ」の侵入・拡散防止に向けた取組を行う。

### 2. 活動内容

#### (1) モモせん孔細菌病対策試験

発芽前無機銅剤散布（3月防除）の回数がせん孔細菌病に及ぼす影響について調査を行った。

#### (2) カイガラムシ類発生予測技術の開発

現地のカイガラムシの発生状況について、調査園を2地点（紀の川市荒見、同桃山町段各1ヶ所）設置し、発生時期の予測技術が確認された。

また、JA 紀の里を通じて桃生産者に対し、防除適期の情報提供を行い、栽培暦の一部改正を行った。

#### (3) 特定外来生物「クビアカツヤカミキリ」監視に向けた体制構築

将来的に那賀管内に侵入が想定される「クビアカツヤカミキリ」を監視する体制を構築し、侵入防止に向けた調査地点の設置を行った。



現地の銅剤処理

### 3. 具体的な成果

#### (1) モモせん孔細菌病対策試験

早期せん孔細菌病抑制効果は、回数、剤の違いによる効果の差は確認できなかった（表1）。

	秀 (枚)	優 (枚)	良 (枚)	秀 (%)	優 (%)	良 (%)	調査枝数 (本)	全葉数	1枝あたり 着葉数
硫黄合剤+ICボルドー66D2回	706	23	0	96.8	3.2	0	63	729	11.6
硫黄合剤+カスミンボルドー2回	573	43	0	93.0	7.0	0	60	616	10.3
硫黄合剤+コサイド30002回	679	14	0	98.0	2.0	0	70	693	9.9
トレノ+ICボルドー66D2回	659	17	0	97.5	2.5	0	64	676	10.6
トレノ+カスミンボルドー2回	669	40	0	94.4	5.6	0	61	709	11.6
トレノ+コサイド30002回	738	23	1	96.9	3.0	0.14	62	762	12.3
慣行(トレノ+ICボルドー66D)	736	28	0	96.3	3.7	0	59	764	12.9

※1 せん孔細菌病病斑の数を数え、0を秀、1～5を優、6～10を良、11以上を外として調査を行った。病斑の大きさは考慮しない。

※2 調査対象は10cm程の新梢に着生している葉の全て(展開が確認された葉)とした。

## (2) カイガラムシ類発生予測技術の開発

積算温度による予測技術の確立と産地で課題となっているカイガラムシ類の防除に向けた取組でJPP ネットの有効積算温度計算シミュレーターを用いた予測日と両面テープトラップによる実測を合わせ、JA 紀の里協力のもと、ウメシロカイガラムシの防除適期について情報提供を行った(5/4)。

その後、追跡調査を行ったところ、調査圃場においてはウメシロカイガラムシ第2世代の発生が見られなかったことからシミュレーターによる予測は有効であると考えられた。

また、並行して防除薬剤に「モベントフロアブル」を用い、ウメシロカイガラムシと歩行幼虫の発生時期が異なるクワシロカイガラムシの同時防除について試験処理を行ったところ、ウメシロカイガラムシ及びクワシロカイガラムシの第2世代の発生が見られなかったことから、JA 紀の里の栽培暦に記載されることとなった。

## (3) 特定外来生物「クビアカツヤカミキリ」監視に向けた体制構築

令和元年11月にかつらぎ町にて発生が確認された標記害虫について、県内一の桃産地を形成する地域農業に大きな影響を与える事が想定される。

このため、那賀地方病害虫防除対策協議会(JA 紀の里、紀の川市、岩出市、和歌山県農業共済組合北部支所、和歌山県農業協同組合連合会、かき・もも研究所、那賀振興局)にて約100地点の定点を設置し、監視体制を構築する事となった。

## 4. 農家等からの評価・コメント

### (1) 実証圃設置農家 M氏

モモせん孔細菌病は農家所得に直結する課題であるため、継続した対策への取組をお願いしたい。

### (2) 調査圃設置農家 K氏

カイガラムシ類(ウメシロカイガラムシ、クワシロカイガラムシ、ナシマルカイガラムシ)の被害が管内の各圃場で深刻化している。本技術によりモモの安定生産につながってくればと考える。昨年は、特にナシマルカイガラムシの被害が大きい年であったように思う。暖冬の影響で病害虫対策も難しいと思うが、次年度もしっかりとした対策を協力してできれば良いと思う。

### (3) JA 紀の里営農指導員 N氏

「クビアカツヤカミキリ」については遂に、という感はある。しかし、産地維持のためには生産者に対する脅し的な取組では栽培をあきらめてしまう人も出てくるおそれがあるため、啓発などは前向きなアプローチをお願いしたい。

## 5. 普及指導員のコメント(那賀振興局農業水産振興課・主査・北原伸浩)

(1) 昨年は気象に恵まれ、結果としてモモせん孔細菌病の被害が少ない年となったが、収穫以降の発病状況を見ていると圃場における菌密度は下がっていないと思われる。油断する事なく、安定生産に向けた産地支援を行っていきたい。

(2) カイガラムシ類の発生予測技術に関しては、高齢化により、幼虫の確認などが難しくなっている生産者もいる中で、昨年は見込み通りの成果が出せたと思う。今年は暖冬傾向でカイガラムシの発生予測が困難となっているが、珍しいケースでもあるので次につながる観察を行っていきたい。

(3) 「クビアカツヤカミキリ」の発生を受けて、生産者への啓発活動は一定以上のレベルで行えたと思う。今後は早期発見・早期抑制を目指し、モモ、スモモ、ウメ圃場を主体に抑止活動に努めたい。

## 6. 現状・今後の展開等

- (1) モモせん孔細菌病対策は、現行の防除暦の見直し、秋期防除の徹底による春型感染枝(スプリングキャンカ)抑制に向けた取組等を行う。
- (2) カイガラムシ類の予測技術は産地の実測による精度向上が課題であり、かき・もも研究所及び、産地と連携し取組を進める。
- (3) 「クビアカツヤカミキリ」調査地点を設定し、監視体制を構築する(那賀管内100ヶ所前後を予定)。